

# 英文講読指導私案

丸 本 郁 子

## I はじめに

現在、本校ではカリキュラムの総合的な見直しが行なわれている。英語科関係も、全分野を総合し、有機的に一体となったプログラムを提出するようにカリキュラム委員会から要請されている。これには二つのアプローチが考えられる。一つは、全く新しく理想的なものを編成することであり、もう一つは、現在の教員構成を考慮し、それぞれが分担している分野の方針を尊重し、その重複、欠落部分を調整しながら、より効果的な教育体系に組みなおしていく方法である。前者は望ましいが、かなり強力な行政的リーダーシップが要求される。より現実的な後者の方法から進めていこうというのが英語専門のカリキュラム委員の意向である。

それには第一段階として、各分野の担当者が各自の授業のカリキュラムを公開する必要がある。講読の担当者として、自分の領域の理解と展開を発表し、全校の英語教育プログラムの一環として有効であるかどうかを検討する一資料としていただこうと思う。

カリキュラムを考える前提として、本校の教育目的、短期大学英語科としての達成目標及び教育対象となる学生の実態の三点が考慮に入れられねばならない。

教育目的は学則第一条に、「キリスト教主義による人格形成を基礎として時代に適わしい高い教養と自由で堅固な精神を培うとともに、実生活においては知性に富み情操豊かで生活技術に卓越した社会の中堅たる女性の育成」とある。ここで大切な点は、大学という教育環境で行なわれる英語教育は、各種学

校が目指す社会の現場ですぐ役立つ職業教育とは異なるということであろう。言い換えると「英語屋」の育成を目指しているのではなく、英語という一言語を専門に学ぶことを通じ、将来のあらゆる実生活の場面に対処していける人間を創ることを目指すということだろうか。カリキュラム編成は、単に技術的な効率を求める方法はふさわしくなく、将来の多面的な発展の基礎となる理論と技術の両面が、かみ合わされたものが要求されよう。

第二点の短期大学英語科における語学力の達成目標について考えたい。学院としての方針はこうであると明確に示されたことはないので私案であるが、卒業時点において、アメリカの平均的大学の一年に入学してやっていける実力と表現したい。具体的には、アメリカの大学に入学する際の入学試験にあたる、たとえば TOEFL や ACT や SAT 等の英語力試験にはパス出来る力である。言うまでもなく、それを目指すのではなく、教育の結果として、受験すれば要求される点数は取れるということである。

最後に学生の実態であるが、全体として言えることは、本校で毎年行なわれている placement test の結果が示すように、ここ数年間の学生の学力は急速に向上しており、前節の目標に到達させることは可能であろう。ただその学力及び学習意欲に個人差があることも事実である。学力の実態も、中学校・高等学校における英語教育の歪みが反映されており、根本的な点、つまり英語は言語であり、実際に用いられている communication の手段の一つという認識に立っての語学力とは言えない。聞く・話す・読む・書くの四技能のアンバランスがあるばかりでなく、それぞれの基礎がおさえられていないことが多い。カリキュラムに関連づけた表現をすれば、中学・高校で学んだことを基礎にして、大学レベルのことを積み上げることは不可能であり、初歩的な事項の学習から、やりなおさねばならない。初年度のカリキュラムの重点として、治療的措置が講じられねばならない。

学生の卒業後の進路であるが、現在までは進学者は少なく、大部分は一旦就職をする。それも直接英語を用いる仕事に就く者はごく一部である。この意味

## 英文講読指導私案

でもカリキュラムの重点は、変化の激しい実務面よりは、基礎作りと、持続して興味と意欲を持たせることに置かれるべきだろう。

## Ⅱ 科目構成

本校の専門科目、英語に関する科目は三つに大別される。A群と呼ばれる基礎科目は全員必修であり、その上に興味と進路に合わせて、B群と呼ばれる、文学に重点を置いた科目群をとるものと、C群と呼ばれる、実務に重点を置いた科目群をとるものとに分かれる。

講読はA群の一つであり、一年・二年共に週3時間で、各6単位ずつ計12単位が与えられる。1時間は50分授業である。一クラスの人員は32人～35人である。

基礎科目であるA群の科目は、次の表に示されるとおりである。

科 目 名	単 位		一週の時間数		
	1 年	2 年	1 年	2 年	
講 読	6	6	3	3	
作 法	2	2	2	2	N.S.
オ ー ラ ル	2	2	3 (4)	3 (4)	N.S.
音 声 学	1	2	2	2	
英 文 法	2		1		
ス ピ ー チ		1		1	N.S.

注 1. NSは **native speaker** が担当することを示す。

注 2. ( ) の数字は、特に必要のあるクラスには、その時間数が配当されることを示す。

これで分かるように、主として書く能力は作法に、聴き話す能力はオーラル、スピーチ、又音声学によって育てられる。講読の範囲は主として「読む」

能力をつけることにある。

### Ⅲ 講 読 の 目 標

一年：英・米の高校生が読みこなせる程度の文章を読めるようにする。

二年：大学生及び一般社会人向けの文章を読めるようにする。

読めるということは、この場合、英文を読むことではあるが、あたかもそれが日本語の文を読んでいるのと同じ効果があることを指す。つまり、目の動きにつれて、一連の語句、又文章が順次現れてくるが、それ等の一つ一つの語句や文章に気をとられることなく、その伝えようとする内容が、イメージとして頭に残ることだ。決してそれは日本語でこれは何というのかと考えることではない。その点では、話を聞く能力と同じと考えられる。正確に言えば、聞いて理解するには、音声面の要素があり、読むとは、視覚から来る情報なのであるが、その違いを除くと両者の能力は同様ではなからうか。通常、読むための文章は、印刷または書き表わされて目前にあり、たとえある語句を読み落したり、理解出来なくとも又読み返すことができる。それに比べて耳で聞く文章は、発音された語から順次消えていってしまう。しかし母国語であればよほど難解な話でない限り、人はそれを理解している。それは最初に現れた語句が一つのイメージを与え、次に現れた語句が又次のイメージを与え、そして順次その積み重ねが、構文のパターンの約束ごとに従って種々の働きをし、伝えようとするメッセージが受け取り手に伝わるからだ。書かれた文章を読む場合も同様で、難しいものでない限り、一回始めから終りにと目を走らすと、そのまま内容がイメージとして頭に残る。つまり伝達する内容が分かる。講読の授業で目指す「読める」ということは、こういう分かりかたをすることを指す。

先に述べたように、日本の高等学校の英語教育は、ともすれば英文に一つずつきちんとした訳を与えることが、その内容を理解することと誤解している傾向がある。その結果、学生は英文を読む習慣がなく、英文を前にした反応は数

## 英文講読指導私案

学の問題を解くように、それをどのように同様の意味を表わす日本語の文章に置きかえるかに注意が集中する。この欠点は難しい語句、表現に出会うと訳が正確に仕上がらないので、そこで思考が止りがちで、全体を見通し、内容を把握できないことと、第二に訳文が一応できるとそれで安心し、その伝えようと著者の意図が何かを特に考えない者もいることである。

又翻訳をすることは、高級な技術であって、英文を理解することを第一ステップとすると、それをきちんとした日本語で表現するという第二ステップが要求される。この第二ステップは大事なことではあるが、英文講読の授業で身につける技術の重点となつてはいけないと思う。両国語の発想の相違、それによつてもたらされる文化の相違、又、特有の表現の微妙さ等を気付かせるために用いることには有効だが、決して連続して行なつてはいけないと思う。いかに日本語で表現すれば良かに注意が向きすぎて、本来の目的一英文の表現に慣れ、英文として意味がわかる一を達する妨げとなつてしまう。スピードが落ちることも短所となる。読む分量は翻訳をする努力に妨げられて減少する。量をこなすことが学習効果を高めるのであって、その点からも、これでは困るのである。

そこで一年の最初の導入期は、この訳すという習慣を、読む習慣へと切りかえる治療期間となる。その上に文章を読む技術ともいうべき、著者の意図を正しく把握すること、それを自己の問題と照らし合せて、更に新しい問題を見出していくという評価や鑑賞のレベルの指導へと移っていく。

授業の究極の目的は、一応の基礎を作り読むことの喜びを知らせ、卒業後は主体的に読んでいけるようにすることだろう。

前提として、基本的な文型、文法の理解は一応高等学校で築かれているとする。その運用及びより高度なものの獲得は、オーラルや文法の時間で得られるとする。文を理解するには、書かれている内容の背景を知る必要がある。それ等は一般教育科目や、他の専門教育科目で順次行なわれていることを想定し、講読で用いる材料は一年より二年へと内容を高めていく。

## IV 授 業 展 開

### 1 年生

#### I 導入期 (約 2 週間)

##### A 目 的

目で見る文章を、丁度耳で聞くのと同様に、最初から順次理解できるようにする。

##### B 方 法

#### 1 最初の授業で目的をはっきり掴ませる。

- a 一つの物語りを音読してやる。
- b 内容を問う。わからない者が大部分。
- c なぜ理解出来なかったかを分析させる。
- d 英文を理解するのに必要な要素が何かを掴ませる。
- e 授業全体の目的・方法等を理解させる。

#### 2 sense group に対する感覚を育てる。

- a sense group ずつに区切った文章を前から順次意味をとらせる。フラッシュ・カードを用いることもある。

(頁例)

And this is                      equally true                      of nations.  
Every country                      tends to accept                      its own  
way of life                      as being                      the normal one  
and to praise                      or criticize others                      as they are  
similar to                      or differ from it.                      And unfortunately,  
our picture                      of the people                      and the way

注：D. Sell, 安藤昭一「英文速読法 I」英潮社 p. 25.

- b 教師が sense group を区切り音読をし、わからせる。

## 英文講読指導私案

### 3 目の動かし方の訓練をする。

- a sense group に分けられた文を、時間を計り、プレッシャーをかけて読ませる。
- b 宿題を出し、時間を計るよう指示し、早く目を動かす訓練をする。
- c 数頁にわたる文章の細部に関する質問をし、その答を探すため走り読みをせざるを得ないようにする。

### 4 文単位での訓練

- a 教師が普通のスピードで一文を音読し、学生もその文を目で追う。
- b 読み終ると、文から目を離させ、その内容を話させる。
- c 前から後へと一回目を動かすだけで、内容を掴む集中力を要求する。
- d 個人差があるので、教材は予め与えておき、予習も可能とする。

### C 材 料

比較的やさしい説明的なものを用いる。

例. D. Sell, 安藤昭一: 英文速読法 I, 英潮社

R. Lewis: *Reading for Adults*, Longman

## II 非文学作品の読み (前期)

### A 目 的

主として、説明・記録・報告等、読み手の理解を目指す知的な傾向の文の読みの力をつける。

#### 1 文の理解力をつける。

- a 文章構成, 展開
- b 段落の要旨
- c 全文の要旨
- d 事実と意見の読み分け
- e 主題と説明の読み分け
- f 表現形態の工夫

#### 2 語彙を増す。

- a 辞書の用い方。特に英英辞書に慣れさせる。
  - b 難しい語句の paraphrase
  - c 文脈に即しての語句の意味
- 3 扱われている文の内容により、文化的背景の知識を与える。
- 4 I の読み方を更に徹底させ、スピードをあげる。

## B 方 法

- 1 一日に進む教材の量を多くする。教科書にある essay なら二つほど。
- 2 授業の開始前に、毎日単語の quiz をする。
- a 当日学習する個所の単語は全部頭に入れてくるのが最低の条件。
  - b 五個の単語を二回ずつ発音し、spelling を書かせ、英語で paraphrase さす。  
10点満点。
  - c quiz の結果の集計は、期末の評価の  $\frac{1}{2}$  に加えられる。
  - d 始めのうち、学生は「試験」と思い、そのみがか大切と思ひ込みがちなので、「授業の前提として単語は必要だから、覚えているかどうかの確認のためにしているのであり、大切なのは文の理解だ」とくり返し説明する必要がある。
- 3 教室では、paragraph ごとに一回読み、本を伏せてその要旨を話させる。
- a 集中力が足りなくて、一回で内容が掴めない者には、何回かくり返させる。
  - b 一文一文でいねいに意味をとることはしない。
  - c 要旨を言う時に、語句や文の解釈のまちがいを発見すると、その時点で説明をする。
  - d 教師が英文を読む時に、説明の必要な個所は、その場で与える。
- 4 topic sentence と example の指摘。
- 5 Outline を書かせる（構成・展開）

## 英文講読指導私案

- 6 字数を定めて summary を書かせる（論旨のまとめ）
- 7 毎日の宿題は、必ず既習箇所を何回かくり返して読む必要が生ずるものを出し、目を早く動かし、内容を掴み・読む訓練とする。（例 5 及び 6 など）
- 8 構成の理解を助け、応用させるためと、背景に対する興味の持続のため、関連した題で short essay を書かせる。  
（例 Lunch in London をすると Lunch at Osaka Jogakuin を書かせる等）
- 9 新しい文章に広く触れ、その要旨を掴む訓練には、教材で扱われている題材から、英語の百科辞典を用いさせる。丸写しを禁じ paraphrase させる。

### C 材 料

I と同じものを用いる。

### Ⅲ 夏休みの課題

小説・物語をなにか一冊読み上げる。

#### A 目 的

教室で扱うものは、かなり量をこなすにして限られたものであるから、これにより大きなものを征服した喜びと達成感を味わせ、自信を持たせる。

#### B 方 法

- 1 予告をし、自分で読みたいものを探させる。
- 2 夏休み前の 3、4 時間は教室にその本を持ってこさせ各自黙読をさせる。
  - a 作者の個性、スタイルに慣れるまでは読み難いものなので、最初の 40 頁ほどを読む時に教師がついて、アドバイスをすると、あとは自分で読み進めるものである。
  - b 毎時間、何頁まで読んだかを聞き、弾みをつける。
- 3 夏休み後、全員に自分の読んだ本の book talk をさす。日本語でも英語でもよい。
- 4 Book talk の原稿は提出させ、期末の評価の  $\frac{1}{4}$  に加える。

#### IV 前期試験

##### A 目的

- 1 教師及び学生が、期間内の学習目的がどれほど達成し得たかを評価・反省する材料とする。
- 2 教師は、教授目的を徹底させる手段として有効に利用できる。

##### B 方法

###### 1 単語の試験

学生に語彙を増す大切さを認識さす。

###### 2 穴埋め試験

既習の文から30個ほどを選び、それぞれ一語の空所をつくり、補わさせる。この準備で学生は習った文全体を何回か繰り返して読む。次の効果が期待される。

- a 文脈の中での語彙が覚えられる。
- b 文の流れ、パターンが無意識の中で育つ。
- c 目の動きが早くなる。

###### 3 要旨をまとめる試験

応用問題。扱わなかった新しい paragraph を与え、字数を定め、日本語で summary を書かせる。本当に力がついたかどうか分かる。

#### V 前期の評価

A 毎日の単語 quiz の平均点	10点
B 宿題及びクラスでの応答	10点
C 夏休み後の book talk	10点
D 期末試験の結果	70点

---

合計 100点

#### VI 文学作品の読み（後期）

##### A 目的

## 英文講読指導私案

- 1 前期は内容の理解に重点を置くので、表現の豊かさを無視する読みになりがちであった。後期は物語りや戯曲を読むことを通し、文学を読む楽しさに触れさせる。
- 2 theme, plot, charactor, style に目を向ける。
- 3 一つの語句、一つの文章の裏にある内容の深さ、豊かさを読みとらせる。
- 4 人生に対する洞察を深めさせる。
- 5 言語に対する洞察を深めさせる。
- 6 内容を音読で表現できる訓練をさせる。

### B 材 料

#### 1 物語り

A. de. Saint-Exupéry: *The Little Prince* の Katherine Woods による英訳本, 英光社

#### 2 戯 曲

William Gibson: *The Miracle Worker* 朝日出版

#### 3 詩

### C 方 法

- 1 一日の分量は *The Little Prince* なら2章ずつ。必ず内容に合わせて区切る。
- 2 単語の quiz は前期同様に続ける。
- 3 授業の始めに前の個所までの summary と point を言い, story の流れを失わせない。
- 4 内容と表現の理解
  - a 教師が音読をする。  
区切り, 強弱, ポーズなどにより理解を助ける。
  - b 訳はせず, story の区切りまで読んだ後に筋を言わせる。
  - c 一方的に教師が解説するのは避け, まず自分の目で発見させる。質問をする。

- i 登場人物の性格は？
- ii どの表現でそれが分かるか？
- iii 著者の考えは？ どこで分かるか？
- iv 語句の意味。なぜその表現を用いるか？
- v 著者の気持は、どこに表わされているか？
- d 友人や教師の意見を聞き、多様な解釈のあることを知らせる。
- 5 ふさわしい個所を選び翻訳をさせる時もある。
- 6 プロによる翻訳の美しいものは、それを紹介。
- 7 宿題として、ある一文をとりあげ、解釈と感想を書かせる。良いものはクラスで読み感動を分け合う。
- 8 物語りの読後、数人のグループを作り、協力して30分程度の放送劇を作りテープに入れさせる。
- 9 詩は教師が出張中の自由課題として与えるぐらいで、時間は割けない。
- 10 戯曲は一幕を二日ほどで読む。適当な個所を役をきめて音読させる。
- 11 The Miracle Worker は主題が言語であるので、人間にとって言語は何かの discussion をさせる。

## Ⅶ 冬休みの宿題

一冊の本を読みあげる。読後は Book talk の他に、その本の climax と思える個所を選ばせ、一頁程度、日本語に翻訳させ、提出させる。

## Ⅷ 後期試験

Essay 形式の試験

### Ⅸ 後期の評価

- |                   |     |
|-------------------|-----|
| A 単語の quiz の合計の平均 | 10点 |
| B 授業中の参加と宿題       | 10点 |
| C 放送劇のテープ         | 10点 |
| D 冬休みの book talk  | 10点 |
| E 冬休みの訳           | 10点 |

英文講読指導私案

F 後期試験の点 50点

合計 100点

2年生

主として論説文・評論文を読ませる。

随筆・伝記等も含む。

I 目的

A 論理的文章に慣れさせる。

B 論旨を正しく早くとらえる能力をつける。

C 論旨の展開のしかた、用語の用い方に注意をはらわせる。

D 論旨の根拠、例証が妥当かどうかに対し意見を持たせる。

E 現代の問題を考えさせる（差別・女性・青少年・人口・環境保全・教育・マスコミ・黒人・インディアン等）

F Eで用いられる語句を増す。

G 筆者の考えに対して意見を持たせる。

H 自己の認識を深め、広げさせる。

I 思考することの素晴らしさを感じさせる。

II 材料

主としてアメリカの雑誌（Saturday Review Atlantic Monthly, McCalls Magazine, Harper's Magazine 等）の記事を集めたもの *Read and Wright*.

III 方法

一年とほぼ同様だが、下記の点で異なる。

A 単語の quiz は前期のみは、日本語で意味を書かせる。後期は英語で paraphrase させる。

B 一つの作品を読み上げると、その批評、感想文を書かせる。

C 読む分量は、内容が濃いので一日二頁程度。内容で区切る。

Ⅳ 試験，評価法，休暇中の課題などは一年とほぼ同じ考えのもとに行う。

## V 学生の反応

教師の意図を学生が正しく受けとめ，達成感を持ちつつ学習が進められるのが理想であるが，このプログラムをどう受けとめているかをみってみる。11月中旬頃に無記名で書かせた授業に対する批判・感想文からいくつかを拾ってみた。

(一年生)

「はじめのうち授業にも，本にもなかなか馴染みませんでした。このごろようやく自分の目で英文を追ひ，先生が読まれるのを耳にして，なんとか意味をつかめるコツがわかりました。入学した頃の私にはとても出来ないことでしょう」

「ただ英文を読むだけでなく，ほんとうに色々と学ぶことがたくさんあります。立ち止って，深い意味を考える時間は貴重だと思います。読むということは，そんなに深い意味をつかむということを本来含んでいるのですね」

「英語を暗記科目のようにとらえていた私の考えは変わったというより，消えそうです」

「先生の授業はむしろかしくて，ついて行けないところがあります。他の先生だったらすごく楽そうやのんと思ったりしますが，その反面，私はなまけてしまいそうです。先生の授業は，いやだけれど，いいと思うという感じです」

「毎回，内容がバラエティーに富んでいて，あきることがない」

「単語のテストは，今は覚えた単語がふえることが大きな喜びと思えるようになりましたが，最初あんなめんどうなものはありませんでした。英和をひくだけでも大作業なのに，英々辞典までなんて。でも今ではあまり苦痛ではなくなりました。習慣とはずいものですね」

「大学生なのだから，強制的なものより，もっと自主的な学習に転換してほしい」

## 英文講読指導私案

(二年生)

「一文一文訳すのではなく、内容把握中心なので頭の中に（一つの英文）としてではなく（内容のある英文）として残って、授業について行きやすい」

「教材は身近にとらえることが出来るものを扱っているので、自然に授業に熱がこもる。その課が終了すると『バイそれでおしまい』という気にならない。どうしても、もう一度、いや二、三度読みかえしてみたいくなる」

「各文の終りに感想文を書くことはとてもいい考えであり、私たちのように日頃あまり真剣にものを考えず、まして書くことをしない学生にとっては社会人となってもプラスになると思います」

「二年になって全く違った授業方法と教科書の内容で、ただおろおろするだけだった。他のクラスと統一してほしいと思う。……不公平だ」

「もう少し余裕がほしいと思います」

「毎回 100 近くの単語を覚えるのはしんどいのですが、自分の可能性というものを広げてくれた気がします」

「長文が一年の時とは比べものにならないほど読みやすく感じるようになった。ポキヤブラリーにしても、なんとなく自信がついてきた。始めは先生に引っぱられながら、いやいややっていたが、この頃では、自分でも張り合いを持って勉強することができるようになった」

## VI 問題点と次の課題

上で見られるように、学生たちは非常に素直で、教師の期待に応えようと、よく努力をしている。しかしいくつかの問題点もある。

- 1 この方法でついて来られない学生がいる。基礎の文型が頭に入っていない者である。これに対する教師側の対処方法は現在次のようである。
  - a つまずきを発見した時、質問のある時に説明をする。
  - b 多読の中で自然にわかることを期待する。

- c 無視して強引に授業を進め、自分で調べねばならないように追い込む。  
他に考えられる方法としては、このプログラムをもう少しゆるめる、基礎からやりなおすクラスを別につくる、学生の選択方法を工夫する、などがあるろう。
- 2 一時間の授業の準備に、二時間かかることを予測する課題を与えているが、他の教科の宿題と重なった場合、今の時間割では、学生に負担がかかりすぎることになる。教師間での調整を教務を通じてする必要がある。
- 3 この授業に工夫を加えねばならない点。
- a 一年前期に用いる文章の選択。現在用いているものは **British** の文であること、又 **information** を与える形の文であるため、内容の **level** が大学生にはもの足りない。
  - b 自由読書の本を選ぶための推薦図書リストの作成。今は自分の知っているものの範囲で選んでいる。
  - c 教材音読のモデル・テープを **LL** に用意し、自習用に備える。
  - d 客観的に **achievement** を測定するテストの開発。
- 4 達成目標・指導法・材料及び評価法が教師によって異なる点。

これがこの文を書く動機となったものであり、学生の反応の中にも指摘されていたことでもあるが、最大の問題点であろう。一年と二年の担当教師が変るといふ現在のシステムでは、二年生に無理と無駄が生じている。この文も一つの材料としていただき、共通の指導案を作らねばならない。

率直な批判を交換し、本校の英語教育プログラムを有効なものにと作りかえていきたいと思う。

(本学助教授)